

うらなひ

川名 大著

『三橋鷹女の100句を読む』

新たな鷹女像の構築

檜田良枝

本書は副題として「俳句と評伝」と銘打っているように、鷹女の生涯と重ねて俳句の変遷を辿っている。一句ごとの懇切で明快な解説と共に、従来の解釈に対して実証的に新たな角度から読解し、情念の人・鷹女の本質と俳句観、生き方を浮き彫りにした画期的な評伝である。

新興俳句研究の第一人者である著者が鷹女の研究を始めた根柢には、鷹女夫妻と地縁、学縁、俳縁があり、鷹女と同じ「俳句評論」の同人、「羊歯地獄」出版記念会に出席、鷹女の告別式への参列など、鷹女に親しみや近さを抱いていたという。その思いが筆致の端々に窺えるのも本書の魅力のひとつだろう。

眼目は新資料の発掘である。三橋謙三

(劍三)自筆「遠藤家、東家、及三橋家の家系大略」。虚子選「日本新名勝俳句」への入選。「鵜頭陣」及び「紺」の綿密な調査。従来「紺」退会後「葦藪」への参加までは空白期間とされていたが、安住敦との親交から「多麻」に出句し、戦後の「諷詠派」にも寄稿。鷹女が指導した「ゆさはり会」会誌の発見。謙三の那古病院跡地の実地踏査など、種々貴重な資料が提示されており、鷹女研究に寄与するところが大きい。

作風の変遷を「三転」と捉え、「向日葵」の「冒険的な句作」から、「白骨」前半の愛息への母情。その後半から「羊歯地獄」へ続く「鱗の剥脱」という自虐的な営為に拠って孤心、老い、死の意識を掘り下げ、最後の「無」では自愛の句も交えながら、臨終の間際まで「鱗の剥脱」を貫いたと概観する。

この変遷の軌跡を逐一辿ってゆく紙幅がないのが残念だが、人口に膾炙した句よりも、新資料に基づいた考察や定説の訂正、鷹女の新しい側面にスポットを当てた句を取り上げ、著者の構築する鷹女像の一端を伝えたい。

蝶とべり飛べよとおもふ雪の重
まず第一句目。従来の「死」「女の憤怒」という解釈に異を唱え、鷹女の詩的感性と想像力の才気、短歌的な叙法による「自由や未来に憧れる青春期の感傷的なロマンティシズム」と読み解く。また動植物に同化、変身する句は鷹女の特徴の一つであり、その発端であると指摘する。

暖爐管し壺の椿を投げ入れよ
樽山荘で虚子歓迎句会の折り、多佳子が落椿を暖爐に投じたときに虚子が即吟した。この有名なエピソードはフィクションであると解明し、暖爐の炎と紅の椿とをスパークさせて「内面の激しい感情を打ち出したオリジナルテイ」であり、「独自の言語空間」とであると評価する。

珊瑚鳥啼いて吾子の青春爛漫色に
「白骨」前半の多くを占める〈母子俳句〉の一つ。関東大震災で嬰兒を抱いたまま家屋の下敷きになり奇跡的に助かった体験による深い絆がベースにある。「敗戦三句」と題する〈子を恋へり夏夜獣の如く醒め〉は未遑の子を思う絶唱である。

馬ほどの蟋蟀となり鳴きつゝのる

出していった。」
更に、富澤赤黄男が病牀で「同じことを幾度繰り返してもどうなるものではない」と語った言葉に衝撃をうけたエピソードを紹介して、鷹女の作句姿勢を「自己模倣の禁忌」と端的に表す。

燕来て夫の句下手知れわたる
最後にこの句に触れておきたい。鷹女の句と同じフレーズを用いた劍三の句に応じたもの。高柳重信は鷹女が影響を受けた人には敬意と共に反発を抱くことから、俳句の先達だった夫に対する「意趣がえし」と見做した。それを受け継ぐ評論もあるが、著者は鷹女のエッセイや著者所蔵の鷹女の生原稿を引用して「夫を茶化すことで、鷹女がそのユーモア・諧謔性を楽しんでいる表現」と解き、長年の謎を明らかにしている。

いまなおべールに包まれた鷹女の難解な句、知られざる素顔を解析し、鷹女の新たな評価に一石を投じた貴重な一書である。

(飯塚書店)

戦時中は意外にも数多くの〈聖戦俳句〉を詠んでいる。著者は当時の状況を詳細に解説し、鷹女もまた国家が強いる戦意高揚とメディアの同調圧力に屈せざるを得なかったと捉え、掲句は蟋蟀に変身した鷹女の閉塞した時代における心の伸びを象徴した佳句と評する。

ふらこ、の天より垂れて人あらず

白骨の手足が戦く落葉季

「白骨」の後半は様相がガラッと変わり、難解な幻想的な句が並ぶ。ふらこ、を首吊りの縄、白っぽい幹や枝を白骨と見立てた壮絶な死の意識の表白である。

葛枯れて一身がんじがらみなり

十方にこがらし女身雑揉に

羊歯地獄 掌地獄 共に飢え

墜ちてゆく 炎ゆる夕日を股挟み

「羊歯地獄」になると更に死や老いへの追求が深まる。周りの植物を浸食する羊歯、あらゆるものを捕縛する掌という地獄を自らの隠喩として飢餓感を表出。一字空白の表記は富澤赤黄男の影響であり、空白という断絶によって、イメージの飛躍をもたらす新しい方法を多用するようになった。

「無」は過去の自虐を追悼する「追悼篇」と、老いや死のテーマを自然体で享受する「自愛篇」から成り、平易な文体の句が多くなっている。

はるかな嘶き一本の無を抱き

老鶯や泪たまれば啼きにけり

「無」以後は「俳句評論」に発表した句と、同誌の「三橋鷹女追悼号」(昭四十七・六)の遺作二十三句がある。

千の蟲鳴く一匹の狂ひ鳴き

夜は夜のハツ手の手毬奪者の手毬

寒満月こぼしをひらく赤ん坊

「一匹の狂ひ鳴き」は千の蟲との同化を拒む孤絶の情念であり、鷹女の本質を最も象徴する一句であるとし、遺作の最後に置かれた「寒満月」の安らかなイメージに、鷹女の安息、解脱、折りが込められていると読み説く。

巻末に著者は鷹女の全体像を総括して次のように記している。

「俳句で詠むべきものは外部ではなく、自己の内部であるという俳句観に立脚して、自己の鋭敏な感性を信じ、他者と容易に同調しない強い自恃をもって自己の内部の様々な意識や情念を掘り下げ、表